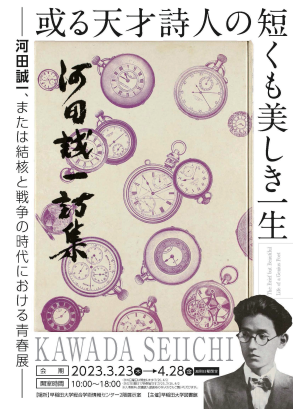


＜開催報告＞或る天才詩人の短くも美しき一生 ——河田誠一、または結核と戦争の時代における青春展——

桑垣 孝平（高田早苗記念研究図書館担当課／展示委員会）

展示概要



ポスターはポップな印象に

2023年春の企画展では、河田誠一という、あまり知られぬ稲門の詩人を主題にした。河田は1911年、香川県三豊郡仁尾町に生まれ、戦前、田村泰次郎や井上友一郎、坂口安吾など、戦後に活躍する文学者たちと青春時代を過ごし、時に天才とまで認められながら、結核に倒れ、22歳で夭折した。河田の人生や作品については、参考文献に挙げた共著

の拙論などをご参照いただくと、本稿では、本企画展を振り返りたい。概要は、以下の通りである。

【展示題】或る天才詩人の短くも美しき一生 ——河田誠一、または結核と戦争の時代における青春展——

【会期】2023年3月23日（木）～4月28日（金）

【会場】早稲田大学総合学術情報センター2階展示室

【出陳資料】右列「展示の構成」参照のこと

【配布物】河田誠一略年表兼著作一覧冊子（B5観音折）

なお、パネルや資料画像はバーチャルミュージアムとしてオンラインで公開中である。Y委員会を中心に展示委員会が自分たちでコードを書いたお手製。企画展



展示風景。縦書き資料が多く、反時計回りのVM化はこれで4本目となり、大変充実してきた。本稿末尾のQRコードから、是非ご訪問の程。

企画意図

本展企画のきっかけは2021年7月に開催された「七夕古書大入札会」で河田誠一資料一括を入手したことだった。調査を進めるにつれ、河田が見過ごされてきた重要な稲門詩人であり、本資料群を展覧に供したいという思いが募った。ただし、本展で主担当を務めた本稿の執筆者は、本学文学研究科現代文芸コースにて、学会というより、出版界に身を置く作



レーザー機器を駆使し、水平を確認する

家、翻訳家、批評家、編集者に学んだ者である。この夭折の詩人を推したいと思いつつ、文学全般に関心を払う人は、とにかく少ないという感覚が強かった。そこで、河田のみを全面に押し出すので



河田の生地・仁尾町（香川県）の海

はなく、主に学部生を念頭に置きつつ、もう少し包括的な物語を紡ぐことで、限界はあるだろうけれども、文学に親しみのない人たちにも足を運んでもらえないかと考えた。思えば、河田の死因となった結核は当時深刻な病気だった。また、欧州では政治的な緊張が高まり、河田に先立たれた仲間たちは戦争に飲み込まれていった——こうした時代背景が企画当時のコロナとウクライナの状況に重なって見えた。と書くと、悲観的に感じられるかもしれないけれど、河田やその仲間たちの資料群は、ほの暗いものを背後に響かせつつ、情熱的で、強くて、言わば、美しく、我々のいる今ここまで届く、ポジティブなメッセージだと思った。時流をものともせず、好きなことをやった河田や仲間たち、そして似た境遇にあった若い文学者たちの資料群が、展示を観る人に自身の道を行く勇気を少しでも与えられれば——そんな意図で準備を進めた。

展示の構成

近代文学の展示は、基本的に資料は平置きで、壁はパネルが中心になる。最初は見栄え的に制約に感じたが、逆手に取って、パネル全体を通じて、上述の企画意図を一篇の物語に収めることを目指した。字数は約1万字。ほとんどの来場者は読まな



緑の上下の力持ちS委員（右）と筆者

いだろうけれども、それでも思いを込めて、だいたい短篇1本分、という気持ちだった。展示は4章で構成し、各章を①河田誠一の詩、②河田と同人たち、③河田誠一詩集、④結核と戦争の時代における青春、と題した。各章の出陳資料とパネルは以下の通りである（それぞれの章の導入パネルは別とする）。①河田の自筆資料／彼の詩の主たる発表先だった詩誌『愛誦』／代表詩のパネル／河田生地の海の写真パネル、②河田の参加した同人誌『東京派』『桜』／田村泰次郎他、仲間たちの自筆資料／仲間たちが河田に寄せた追悼文パネル／母校早稲田大学第二

高等学院の写真パネル、③遺稿詩集『河田誠一詩集』（昭森社）／昭森社刊行の稲門作家書籍／『河田誠一詩集』主要頁パネル、④河田たちと似た運命を生きた詩人たち＝森川義信と鮎川信夫の自筆資料／森川の代表詩「勾配」パネル他、である。とは言え、詩が好きな人も来てくれるだろうと、昨年、全集刊行が話題になった左川ちかの最初の詩集と『河田誠一詩集』と一緒に並んでいる昭森社の広告をパネルにしたり（第3章）、詩誌『愛誦』も（収書するまで、筆者もその名を知らなかったが）沙良峰夫文庫の印が見えるように並べたりした。森川義信は、戦後の重要な詩誌（第2次）「荒地」同人たちに影響を与えながら、戦中に夭折した河田と同郷の詩人である。本来、彼の自筆資料は1つの展示の主題になり得るもので、今回は贅沢な使い方だった。なお、本展含め、近年の企画展の英訳はローリー館長の手による。書くまでもなく、常に原文より美しい。改めて、御礼申し上げたい。

新味の広報、仁尾町への訪問

今回、久しぶりに広報物を外注した。自前で作成すれば、日程やデザインの細々した調整が利く反面、質ではプロに敵わない（かつ、慣れぬ職員が作ると、結局、時間＝支出もかかる）。作成したのは①ポスター（A1、A2、A4）、②河田誠一略年表兼著作一覧冊子（B5 観音折）、③垂れ幕である。河田の草稿類と並び、本展の目玉『河田誠一詩集』の、草野心平による装幀が美しく、S委員が特殊な版權処理を調整し、O委員が業者と細かく内容を詰めて広報物の随所に散りばめていった。結果、ポスターは白が基調のポップなものに。名の知れぬ詩人の紹介に際し、人物情報の提示は必須であるが、パネルには収まらない——という経緯で、冊子はノベルティを兼ねつつ、展示の重要な1要素として作成。さらに、入館ゲート前を見下す3階バルコニーから巨大垂れ幕を下げた。当初は、設置実績のある大きい横掲示を作成予定だったが、展示委員会内で、やったことのないことをやろうとなった。相当目立ち、図書館関連イベントの広報手段として新たな可能性を示せたのではないかと。ポスター配布は、本学の近代文学関連の先生方にお声がけす



地元スーパー掲示のポスター



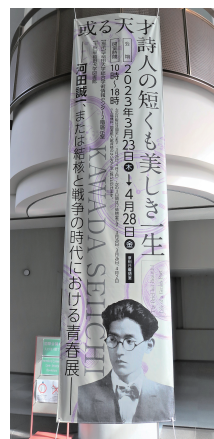
マスノの準備した清子の墓

ると、快く引き受けてくださった。この場を借りて、御礼申し上げます。また、T委員が河田の出生地を訪問したことも特記しておきたい。当初は、詩パネルの挿絵用に香川県は仁尾町の海を撮影するという単純明快な計画だった。しかし、ついでに撮るつもりだった、ネット上で見かけた河田の詩碑の所在が分からない。Tの奥様がSNSを通じて「仁尾の文化を伝える会」

の方々と繋がると、あれよあれよとお出迎えの旅程となった。このご縁で、本展ポスターは誠一の生家、出身校の現・観音寺第一高等学校、はたまた地元スーパーにまで貼られる運びとなった。仁尾町の皆様に、改めて、御礼申し上げたい。なお、河田の詩碑は、なんと地元の文学者がベニヤ板を加工した私製だった。

展示の成果

来場者数は、計2750人だった。名の知れぬ詩人が主題の展示としては、十分な入りだったのではないかなと思う。自由にやらせてくださったS展示委員長に感謝申し上げたい。また、わざわざ仁尾町からのご来場もあった。本展が少しでも町興しに寄与できたなら、幸いである。さらに、誠一の姪御様が来てくださったのも、サプライズだった。1時間程お話をうかがい、2点、ここに明記しておきたい。1点目は「河田」の家系としての読みが「カワタ」である点である。北原武夫が『桜』河田追悼号に寄せた文章に、誠一本人が「カワタ」と自称した挿話が見え、本展はそれに拠っていた。自認の問題は残るかもしれないが、家系としての読みが「カワタ」であることを明記しておきたい。2点目は、誠一の母マス



巨大垂れ幕



誠一の位牌の中にある清子の札

ノが、誠一の従妹で恋人・清子の墓と位牌を準備していた点である。誠一の生前、マスノは二人の関係をよしとしなかった。しかし、河田家の墓の傍に石があり、それがマスノの準備した清子の墓なのだそうである。さらに、生家に残る誠一の位牌には、清子と書かれた札が取まっている。姪御様は、マスノが最期は二人を許したのだと思う、とお話になられた。姪御様には、ご来場いただき、また貴重なお話を共有していただいたことに、深く御礼申し上げます。この他、SNS上では研究者や編集者の反応があった。個人的にうれしかったのは、河田のWikipediaページが作成されたことである。没後、田村や井上が遺稿詩集を刊行し、研究者ではない、古書店主・青木正美が関連資料保存の礎を築き、同じく非専門家である我々図書館員がそれを引継ぎ、また、別の誰かが現れる——作品の真価を問うにはあまりに短い一生だったが、この詩人が、時を超え、友人たちに恵まれたのは、間違いのないだろう。（了）

参考文献：桑垣孝平・長谷川敦史「河田誠一の詩と生涯、及びその詩集成立と遺稿類について」（『早稲田大学図書館紀要』第69号）

バーチャルミュージアムはこちらから⇒

